

# 長久保赤水と中国歴史地図の編纂

周 振 鶴  
鶴 間 和 幸

## はじめに

中国で長久保赤水（一七七一—一八〇一）という人物を知る者はほとんどいないが、現代の日本人の間でも知る者は多くない。しかしこの長命の老学者は日本の地図史上見のがすことのできない重要人物であった。のちの伊能忠敬（一七四五—一八二八）が近代的測量技術によって測量図の新時代をきり開いたというならば、長久保赤水是伝統的な旧時代の製図法において一つの時代を作った。しかも伊能の実測日本地図が出現してからも、長久保赤水の日本地図は生き続けた。その一つの理由は、幕府が伊能の地図を実際には用いず、外部の人間にも閲覧を許さなかったことにあり、もう一つの理由は伊能の地図が内陸部の記載に十分でなかったことにある。したがって長久保赤水の日本地図が国内や海外にも長いこと普及することになった。こうして長久保赤水と伊能忠敬とは日本地図史上の双壁となった。

従来こうした赤水の世界地図や日本地図については専門的論稿があるものの、赤水自身に関する研究は十分とはいえないし、日本で例のない中国歴史地図の編纂については言及する者はほとんどいなかった。

本稿では中国歴史地理学の立場から赤水の中国歴史地図について詳しく検討していきたい。

さて長久保赤水の生きた江戸時代後期は儒学が普及し、漢学が国をあげて強く奨励された時代でもあった。同時にまた西洋の科学技術が蘭学として日本に入り、きわめて重要な時代でもあった。赤水はこのような時代の雰囲気の中で地図の制作事業をなした。かれ自身儒学者であり漢学者であったし、また地理学者でもあった。かれは中国古代の地理学者と同じ道を歩んだ。古代の中国では地理学は史学に付随するものであったし、しかも地理学者といっても史学家ではなく経学家に属した。

長久保赤水是水戸藩下の常陸国多珂郡赤浜村（現在の茨城県高萩市大字赤浜）に生まれた。水戸は儒学の風の強かった地であり、儒学を伝えた明末の遺民朱舜水が水戸藩主徳川光圀に礼遇されて終焉の地ともなった所である。赤水十六才のとき師から漢文を学び、論語、唐詩選からはじめて四書五経、老子、莊子にいたるまで精通するようになった。論語古訓や春秋左氏伝まで講義できたし、漢詩を作って中国人と競うこともできたという。六十一才のときに、第六代水戸藩主の侍講となり、このときから八十一才まで江戸の水戸藩邸に居住すること

なった。儒学の知識が深く、『儒仏辯』『五常図説』『礼記王制地理図説』などの著作をあいっいで完成させた。赤水は儒学以外にもとくに天文地理学にしたしみ、『天文管窺抄』『東奥北越紀行』『長崎行役日記』などの著作も世に出した。しかしもつとも注目すべきは中国の歴史地図を日本ではじめて制作したことであり、かれの一生のなかで輝かしい業績といえよう。

## 一、『大清広輿図』の編纂

長久保赤水は五十二才（一七六八年）のときに、地図の制作を始めている。この年に日本地図の草稿を作り、地図のなかには縦横に交差する方格を画いた。これがのちに出版され『赤水図』と呼ばれることになる『改正日本輿地路程全図』の原図である。これはまた日本ではじめて緯度線を書き入れた地図であった。当時はまだ経度の測定値はなく、のちの伊能忠敬の仕事を待たなければならなかった。

六年後、赤水は清から輸入され江戸幕府が発禁処分とした『職方外紀』を読み、世界地理の知識を広げていった。その後まもなく世界地図の制作をはじめ、一七八五年六十九才のとき、『改正地球万国全図』を完成させた。かれはここでは地球球体説を紹介し、中国では伝統的であった天円地方説には同意していない。西方の近代科学を受け入れたからであった。

しかしながら赤水はまず一人の儒学者であり、中国文化への傾倒も強い。世界地理の知識を『職方外紀』から得ていたとすれば、中国地

理の知識の方はさらに深いものであっただろう。これはかれ自身のことばのなかにもうかがえる。五十一才（明和四年、一七六七年）のときに長崎に行き、故郷の隣りの磯原村から安南へ漂流した人物に会い、『長崎行役日記』を執筆した。日記の一節に

十月十五日土産を買って桜町組頭弥兵衛の書店に行くとき、その父君の兵太夫は漂流者と会ったことを話してくれた。そのときに大明分野の大図を見せてくれた。その地図は模写したものであったので誤字が多く、河流の道筋にも誤りがあったので、一つ一つ訂正しておいた。

と見える（口語訳）。このことからすると、赤水は中国の歴史と地理にかなり熟知していたので、『改正地球万国全図』の完成の二年前（天明三年、一七八三年、当年六十七才）には、『大清広輿図』の原図をすでに書き終わっていたようだ。この地図がいつ制作しはじめたのか知るすべはないが、数年の努力が必要であっただろう。

天明五（一七八五）年に刊行された『大清広輿図』は、幅六尺五寸、長さ六尺四寸（一八五・八センチ、一九〇・九センチ）の大きさの彩色大地図である。山岳は緑、河川は青、各省も色わけしてある。地図右下の凡例には「唐土大図の世に行われし者に善本あるなし。今蔡九霞の広輿記図に拠りてこれを拈げ、諸書を以てこれを増訂す」とある。『広輿記』とは明の陸応陽の著作であり、清康熙二五（一六八六）年に蔡九霞が増訂した中国の地誌である。巻首には中国全図と各省の分図が載せてあるが、全国図はきわめて簡略であり、分省図の方は詳しい。しかし赤水の『大清広輿図』に比べれば簡単なものである。『大清広輿図』の地図は見たとおり精細であり、記入した地名や参照資料も

より豊富である。長久保赤水は『広輿記』の図を基礎に、そのほか多くの中国の文献を参考にしながら制作した。凡例にある「これを拵げ」「これを増訂す」という意味は、そのことをいうのであろう。

海野一隆氏の考証では、赤水が依拠した蔡九霞の重訂『広輿記』は刊行年不明の「大文堂藏板」本のことである。他の版本の『広輿記』は明の羅洪先の「広輿図」系統を踏襲しており、ただ大文堂本の巻首に挙げるものは康熙図系統の地図に属する。いわゆる康熙図といわれるものは、西方の宣教師が実測した『皇輿全覽図』であり、その地図の形は精密であり、経緯度も記してある。赤水は重訂『広輿記』以外に、『古今圖書集成・職方典』と乾隆版『大清一統志』所載の地図、および清初に游子六が著した『天経或問』などの書を参考にした。

筆者が茨城県立図書館で閲覧した重要な資料は、海野氏の推測を裏付けるものであった。写本『赤水文章』のなかに、赤水が程赤城にあってた書簡がある。程氏とは長崎に來た清朝の商人であり、ある人物の紹介で『大清広輿図』の序文を書いている。赤水は書簡のなかで謝意を表し、

今広輿図、梓成りて全幅を装い以て呈覽す。此の図は蔡九霞の広輿を拵げ、游子六の経天合地に拠り、一統志の里□（原本一字空き、その前の里の字も曖昧）を取り、史志、図書の名勝古跡を考え以て旧図の足らざるを増補す。

と述べている。<sup>4</sup>ここでは游子六の強い影響が語られている。游氏の『天経或問』のなかには「禹書経天合地之図」がある。これはいわゆる経天合地つまり中国古来の作図の形式であり、これに西方の地図の経度、緯度も取入れている。これは明清交替期に西学が東漸した結果であっ

た。赤水は水戸学派の荻生徂徠を継承し、実証を重視した儒学者であった。かれは西学の影響を受けた先進的な漢学にたいして特別な敬意をもっており、『大清広輿図』とこの『唐土歴代州郡沿革図』にも経緯度を採用した。したがって『大清広輿図』の正式名は『経天合地大清広輿図』といった。

この書簡によれば、赤水は蔡、游両氏の著作以外にも『（乾隆大清）一統志』やその他の史志、図書を参考にしている。『大清広輿図』は赤水が数多くの中国の書籍を参考にして心血を注いだ労作であった。博識の赤水は多くの資料を参照しえたので、『大清広輿図』は日本の歴史のなかでももつとも詳細で正確な中国地図となった。中国人が制作した地図と比べてもなんら遜色がなかった。

『大清広輿図』は清朝という時代の地図として清初の省府州県名を記入したが、同時に数多くの歴史地理と人物の事績を注記した歴史地図でもあった。たとえば各省府には「禹貢」時代の州名や、春秋戦国時代の行政所管、またそのほかの重要な地理沿革も注記している。浙江省杭州府の地名を四角で囲った両側には、「古揚州域」「春秋吳越の地」と付記し、上には「宋高宗の都臨安」と書いてある。一般の府には古い地名を添えてあることが多く、松江府は「古は雲間という」、揚州府は「広陵郡」というように記入してある。人物の事績と名勝古跡の例は多く、揚州府には「宋の祖系の李重（光）ここに遊ぶ。城内に二四橋あり、唐詩にいう『二十四橋月夜に明らかなり』は即ちこれなり」というように書かれている。しかし一枚の地図にすべての中国史の重要人物、事件、地理沿革を記入するのは大変難しい。長久保赤水もおそらくそうした理由からか、中国歴史地図集を編纂することに思いつ

いた。『大清広輿図』を完成した六年後に、赤水は『唐土歴代州郡沿革地図』を編纂した。これは日本ではじめての中国歴史地図集であり、日中文化交流の重要な成果であった。

さて中国には昔から歴史地図を編纂する伝統があった。『後漢書』王景伝には後漢の明帝が王景に『禹貢図』を与えたことが見える。これが歴史地図であったかどうか、にわかには断言できないが、その後『晋書』裴秀伝に裴秀が『禹貢地域図』を作ったことが見えるので、こちらの方はいまのところ中国でもっとも古い歴史地図集といえよう。その地図の序文に「今上禹貢の山海、川流、原隰、陂沢、古の九州および今の十六州、郡国県邑、疆界郷陬及び古国盟会の旧名、水陸径路を考じて、地図十八篇をなす」とある。あきらかにこの地図は禹貢の時代から西晋当時にいたる自然地理、人文地理の変遷を画いた歴史地図集であった。そのすぐあとの南朝梁の時代にも『古今春秋盟会地図』という地図が現れた（『隋書』経籍志）。この今古というのは新旧の地名対照のことであろう。隋唐から北宋の時代にも歴史地図集が作られたはずであるが、伝わっていない。現在見ることできるもっとも古い歴史地図集は南宋紹興三（一一三三）年以降に刻された『歴代地理指掌図』である。東洋文庫に現存するものが唯一の版本である。<sup>5)</sup>

南宋陳振孫の『直齋書録解題』は蜀人の税安札の編纂したもので、北宋末年の元符年間に成立した。『歴代地理指掌図』は全部で四十四枚の地図を収め、古今歴代の地理沿革を著している。出版されたあとにも何度か再刻され、署名もないものもあるが、なかには蘇軾の序文のあるものも見える。これによれば、紹興二十（一一五〇）年にはいわゆる『東波先生指掌図』が日本に伝わっていた。『歴代地理指掌図』は

中国の地図学史上重要な著作であった。普及した期間が長かったばかりでなく、後代の歴史地理の地図に大きな影響を与えた。その後、半世紀たち楊甲『六経図』が刊行され、つづいて程大昌が『禹貢山川地理図』二巻を宋の孝宗に献上した。また唐仲友の『帝王経世図譜』なども刊行された。しかし地図が小さく、しかも上古の時代に重点が置かれていた。『指掌図』のように歴代の地理沿革全体を体系的に表現した専門的地図集は明代中期まで出現しなかったため、この地図は明代に入ってからまたえず翻刻された。

明清時期は一枚の紙面に画いた歴史地図が盛んに刊行された。明末清初には、『古今景勝図』『乾坤万国全図古今人物事迹』『天下九边分野人迹路程全図』『歴代分野輿図古今人物事迹』などの地図があいつぎ、歴史的事件と歴史上の人物とが図中に標示してある。長久保赤水の『大清広輿図』に見える歴史記述は、これらの地図を受け継いだものである。明代後期の『三才図絵』や『図書編』などの類書には多くの歴史地図が収められているが、それらは『指掌図』を模倣、転載したものにもおよばない。明末の崇禎年間になると、『閩史約書』『古今輿地図』といった専門の歴史地図集が出現した。呉国輔の著した後者の三巻のなかに通史図、断代図（一王朝の地図）五十七種が収められている。これは明代においては『歴代地理指掌図』に唯一比肩しうる歴史地図集であった。

日中間には密接な文化交流が長期にわたって続いたので、中国の書籍も出版後すぐに日本に伝わり日本でも刊行された。長久保赤水のような傑出した地理学者は数多くの中国歴史地図を目にすることができたので、これが契機となって中国歴史地図を編纂することになった。

## 二、『唐土歴代州郡沿革地図』の編纂

江戸時代に編纂された中国歴史地図は少なくないが、長久保赤水以前には専門的な中国歴史地図集は見あたらない。赤水の『唐土歴代州郡沿革地図』は画期的な著作であり、作図の技術水準の高さと当時の需要とがあいまって重版、改訂を百年も繰り返し（書名も多種あり）、現在でも改訂版は巷間にまれに見かけることがあり、筆者も最近一部購入した<sup>7)</sup>。まずこの地図の版本について考察していきたい。

### 【版本】

『唐土歴代州郡沿革地図』の初版の年代と書名については、いままで明らかにされてこなかった。筆者は神戸市立博物館で刊行年と出版者不明の二種の刻本を調べたが、一種類は上述の書名（以下乙本と呼んでおく）、別の一種類は『古今歴代沿革地図』（甲本と呼んでおく）と題してあった。両種の版本は木版手摺りで水戸の赤水の著者名がある。巻首には古杭の沈琬繪、乾隆五四年（寛政元年、一七八九年）の序文、水戸立原万（字は翠軒）、寛政元年の序文となっており、両版本の大きさは近い（甲本は縦三五・五、横二〇・八センチ、乙本は縦三五・三、横二〇・二センチ）。また両者とも十五枚の地図を収めており、その内容も地図名も同じである。すなわち大青海陸道程図、禹貢九州図、周職方氏図、春秋列国図、戦国七雄図、秦三十六郡図、西漢州郡図、東漢州郡図、三国州郡図、兩晋南北朝図、唐十五道図、大明一統志図、亜細亞小東洋図の十五枚である。両版本は一見何の違いがないようであるが、細かく調べてみると刊行時期が前後しているようだ。

両方の東西（前後）漢朝の地図は州別に色分けしてあるが、色の違いからみると、甲本の東漢の地図には魯と沛国が兗州に属している。両国は本来豫州であるから、これは誤りである。一方の乙本は正しく色分けしてあるので、乙本の方がのちに修正して出版したことがわかる。しかし両版本の刊行年はやはり手がかりがない。

赤水が初版の書名を『古今歴代沿革地図』とし、のちに『唐土歴代州郡沿革地図』と改めたと見ることは、かなり疑問である。理由の一つは立原翠軒の序文が「古今沿革地図序」と題していること、二つは上で触れたように乙本は甲本を修正してあとから刊行したからである。もしこのように考えて間違いがなければ、神戸市立博物館所蔵の『古今歴代沿革地図』が赤水の著作した最初の版本であろう。刊行年はいまだにわからないが、沈琬繪と立原翠軒の序文はいずれも寛政元年に書かれ、これは出版のために書かれたものであるから、寛政元年当年ではなく、そこからそれほどたないうちに刊行されたのであろう。海野一隆氏がいうように、日比野丈夫氏蔵の『唐土歴代州郡沿革地図』のなかに、刊行年、出版元をつぎのように表記した紙片が付してあった。

寛政二年庚戌歲冬至日

室町二丁目須原屋

東都書林

申椒堂市兵衛

池之端仲町須原屋

青藜閣伊八

この紙片が原本にあとで付したものであり、原本の地図自体は寛政元年本であると断定するには疑問があるので、紙片の内容のみをあげて

後考を待ちたい。またこの版本の内容がさきの甲、乙本とどのような違いがあるのか、どちらかとまったく同じであるのかは実際に手にしていないのでわからない。もし詳しく比較することができればなんらかの収穫があるだろう。

しかしもし日比野丈夫氏所蔵本が寛政二年本であることが確定できれば、『古今歴代沿革地図』の方は寛政元年の出版であることに疑いはなくなる。再版で書名を改めた理由は、原著名のように国名を冠していないと、中国の地図であることがわからないし、中国を中心として世界を見ることになってしまふからであろう。中国を世界の中心とするのは現実とは異なる。何もいわないときには日本のことを指すのである。

刊行年を記したもつとも古い版本は、いまのところ文政十二（一八二九）年版であり、これは早稲田大学図書館（二部あり）に見えるだけである。この版本は非常に重要であり、その後の版本より六年早いだけであるが、赤水の沿革図の二種の版本の分期となっている。文政十二年本は木版手ぬり彩色、さきの甲乙本と同じである。この理由は二つ考えられる。一つは当時の木版摺りの技術水準はあまり高くなかったこと、もう一つは赤水の沿革図にたいする需要は当時はまだあまり大きくなく、手ぬりで十分間に合ったことである。後者の理由の方が可能性が高い。この版本の出版元は江戸書林であり、上述の日比野氏所蔵本に付してあった紙片の東都書林と同様、出版量は少なかった。当時の日本最大の出版の中心地は大阪にあり、浪華書林であった。したがって赤水の沿革図の需要が次第に多くなったときには、木版摺りに改めて浪華書林で出版せざるをえなくなった。のちの天保六年版が

そうである。

早稲田大学所蔵の二種の文政版赤水沿革図の大きさは、三五・五センチ、二〇・四センチと三五・〇センチ、二〇・〇センチである。しかし図集内の同一の地図は大きさが同じであり、まったく差はない。序文も甲乙版と同じく二つあり、目録と十三枚の地図からなっている。ただ最後の二頁は甲乙本にはない版元を記したものであり、つぎのように書かれている。

文政十二年己丑三月

浅草茅町二町？日 青藜閣須原屋伊八

江戸書林

浅草新手町 慶元堂和泉屋庄二郎

このなかの伊八の名は日比野氏所蔵の紙片にも見えているが、そこでは須原屋青藜閣というように逆に並んでいる。その理由はわからない。また文政版の地図の内容は乙本と同じであり、後漢の渤海郡は着色していないし（州界から見ると青州であるが）、魯と沛の二郡の色は豫州と同じである。天保版以後とは異なっており、渤海と青州の色は同じくしてあるのはあきらかに誤りである。

天保六（一八三五）年版は比較的見かける版本である。木版摺りであることから、大量に出版されたことがわかる。日本国内の多くの図書館に所蔵されている。この版元を記入した箇所には、天保六年乙未春に洗板訂正と書かれているが、前述の版本と比較しても訂正の箇所はなく、かえって間違った所がある。さきですでに指摘したように、後漢渤海郡は冀州に所属すべきであるが、乙本と文政本はともに着色していないのは、偶然のことではない。筆者は乙本については三種（神

戸一、早稲田二、文政本については二種見ており、みなこのような誤りを犯している。これは手ぬりを担当した者が何色を塗ってよいか知らなかったのか、かれらの責任ではない（甲本の渤海の色が正しいのは、赤水本人が板刻の誤りを修正したからであろう）。

版刻の州の区分けでは渤海は青州に属しているが、甲本の色分けでは冀州に属するので、しかたなく空白にしてある。天保本は委細かまわずに渤海を青州と同じ色に塗ってしまった。この時代はすでに赤水が世を去ってから三十数年、赤水のような才能のある人物はもはや見えないので、訂正もできなかった。天保版の「洗板訂正」というのは当時の出版用語にすぎなかった。

天保本は少なくとも二種あり、どちらも二つの序文と、目録、十三枚の地図、そして大きさも同じである（三五・四センチ、二〇・四センチと三五・三センチ、二〇・五センチ）。しかし出版者はつぎのように異なっている。一つは

心齋橋通 博労町 伊丹屋善兵衛  
浪華書林

同通 北久太郎町 河内屋喜兵衛

もう一つは

大阪 心齋橋通 安土町 京屋浅二郎

甲本から天保六年本にいたるものを見ると、序文、地図や内容ばかりでなく、刻工も同じである。各版はひとしく「劊剛（劊は曲刀、剛は曲鑿、彫刻師のこと）江川美啓」と注記してあるので、これらの四つの版本が同系統であることがわかる。

天保六年版は二十年にもわたって普及したが、安政二（一八五五）

年になって『支那歴史沿革図』という書名の改訂版に代わった。この年はすでに日本が開国してから三年目にあたる。改訂とはいうものの版型を大きくし（三六・四センチ、二四・四センチ）、地図を一枚増やして地図の名称をすこし変えただけのものにすぎなかった。内容は天保六年版をそのままにしているだけで、かえって誤植が見られる。たとえば唐十道図のなかに西川（節度使）とあるのは西河の誤りである。このような赤水原著の改訂は赤水の著者名もなく、序文に赤水の名前さえ見えない。惺軒二宮彝の撰、雪城沢俊卿書と序文に見える二人の名はよくわからない。序文で「余家は素より支那歴史沿革図一巻を蔵し、頗る精詳。惜しむらくは蠹蝕紙に満ち、字面稍や残缺、観る者これを憾む。因りて善図訂正の竟を募り、劊剛公を世に命ず」とある。しかし実際は版木の彫刻をしただけであって訂正の箇所もなく、書写しただけであった。この地図集はいうまでもなく木版色刷りだが出版元の記載はなく、鳴鳳楼藏版とだけある。巻末には会津佐藤長撰後序と見えるが、かれがいかなる人物かわからない。またこの図集の冒頭には「新訂万国略全図」一枚が加えられているが、これは当時の開国時の需要に合わせたものであろうし、赤水の原図との違いを表している。図集を改名しても、頭かくして尻かくさず、内容はあきらかである。

赤水の地図はながいこと再版されなかったが、社会的需要は小さくなかった。安政二年版が完売してからは、二年も経ないうちに安政四（一八五七）年に重版された。このときは『唐土歴代州郡沿革図』（地の一字がない）の原著名が復活し、前の版で加えられた万国図が姿を消し、赤水の原図とまったく同じである。しかし前後の序文は前版と

同じであり、長久保赤水の名もあがっていない。前版の成功によって原著名が復活したばかりでなく、出版元と発行元の名前も明記された。出版元は、大阪積玉圃河内屋喜兵衛、文栄堂伊丹屋善兵衛、発行元は発行書林として江戸須原屋茂兵衛、伊八、新兵衛、山城屋佐兵衛、政吉、岡田屋嘉七、和泉屋金右衛門、吉兵衛、岡村庄助、出雲寺万次郎、名古屋の永楽屋東四郎、および京都出雲寺文次郎などである。赤水図は出版史上空前の評判をえた。この版は今日でも古書店でたまに見かけることがあり、筆者の購入したのもこの版であった。

以上の六種の版本以外に神戸市立博物館で書名の異なる二種の版本を目にしたが、実質『唐土歴代州郡沿革地図』を別に増刷したり版を大きくしたりしたものにすぎない。その一つは『坤輿概図』と題するものであり、乾、坤二冊に分かれている。水戸長赤水著と署名しており、序文はなく版權を記した頁もない。抄本手塗り彩色、版型は三五・四、一九・六センチ。上述甲乙本の十三枚の地図のほかに、地球北方の図、地球南方の図、大日本国の図、長崎湊大概図、蝦夷松前国図、無人島大小八十余山図(原題は小笠原島ト伝)、琉球附三十六島及び台湾図、朝鮮国の図等八図がある。地図の配列には順序が決っていないし(唐十道図が最後にあったり、上の八枚の地図が両晋南北朝郡図の後に差しこまれているというように)、内容もまちまちである(当代の地図と歴史地図が並列しており、中国地図、日本地図、世界地図が混ざっている)。長久保本人の編纂したものではなく、出版者が集めて整理した書であろうか。奥付もないので、刊行年もわからない。

もう一つのもは『古今歴代中華地図』である(東北大学、早稲田大学図書館にも所蔵)。沈婉繪の序文があり、木版彩色刷り、さきの四

種の版本と比べると最後の亜細亜小東洋図の一枚が足りない。奥付もなく刊行年もわからない。内容は天保六年版とまったく同じであるが、版刻の出来はずつと劣っている。彩色、紙質もおよばないし、版型も小さい(三二・八、二〇・四センチ版と三二・三、二〇・四センチの二種あり)。甲本から天保本まで版型は一つではないが(早稲田大学所蔵二種乙本、大きい方は三七・〇、二〇・五センチ)、それは紙の裁断が異なっただけであり、地図自体の大きさには差はない。この版本は明らかに他の版本よりも小さく、各図の海南島の部分は半分しか印刷されていない。またこの版に粗雑な箇所があるのは、二つの例を挙げれば明かである。すなわち前述の四種の図と異なって後漢図に台湾が抜けており、明代図にも長城と辺境部分がない。この版は書店側が市場の需要に応えるためにその場しのぎの印刷をしたようである。刊行年代は天保六年より後である。

以上述べてきたのは筆者自身が確認した『唐土歴代州郡沿革地図』の各種版本であり、いまこれらの版本はつぎのように整理することができる。

- 甲・古今歴代沿革地図 寛政元年? (一七八九?)
- 乙・唐土歴代州郡沿革地図 寛政二年? (一七九〇?)
- 丙・唐土歴代州郡沿革地図 文政十二年 (一八二九)
- 丁・唐土歴代州郡沿革地図 天保六年 (一八三五)
- 戊・古今歴代中華地図 刊行年不明
- 己・支那歴代沿革図 安政二年 (一八五五)
- 庚・唐土歴代州郡沿革図 安政四年 (一八五七)
- 附・坤輿概図 刊行年不明 (この図は中国歴史地図の専門地図)



ではないので最後に付した)

甲から庚までの七種の版本はだいたい三系統に分けることができる。甲本から丁本は同一の刻工による同一の版式であり、戊本は前四本をもとにした粗雑な模倣本である。己、庚両本は前四本をより精緻にした刻本である。甲から丁の四つの版本は二種類に分類できる。甲、乙、丙は木版手摺りであり、丁本は木版彩色摺りである。

#### 【制作の動機】

長久保赤水が中国歴史地図集を編纂した動機と経過が今日なお明らかでないのは、赤水本人がなにも記録を残していないからである。『大清広輿図』と『唐土歴代州郡沿革地図』には藩主の文公德川治保の命を受けて制作したと記してある。とはいうものの本来の動機は、赤水本人が天文地理を愛好し中華文化に傾倒していたことであつたようだ。かれ自身「少きときより地理輿図の癖あり」といつている(『復小山田子鳩』、『赤水文章』所収)。また「性は少きより文字の癖あり華人を夢寐すること久し」(『清槎唱和集』)。かれは中国文化に親しみ中国人と交友しようとし、明和四(一七六七)年長崎に数日間だけ滞在した。しかし法律が厳しくて中国人と交流することは許されなかつた。赤水は日本人の通訳官を通じて清朝の商人と書簡を交わして交歓した。のちにこの書簡と詩歌は刻印されている。またかれは莊子を尊敬していたので、本名の守道を玄珠に、字の伯義を子玉に改めたほどである(いづれも『莊子』からとつた)。このような赤水であつたから、自ら中国地図を制作する衝動感も高まつていった。さらに赤水は人一倍の好奇心と―長崎に行ったのめかれ自身の用事ではなく、里長に代わつて自分から申し出たことであつた―実証的な精神をもちあわせていた。『大

清広輿図』を画きおえたあともひきつづいて『唐土歴代州郡沿革地図』にとりかかったのである。赤水の友人であり水戸藩彰考館総裁立原翠軒の序文で「(赤水は)又大清輿地大図を作り、皆天下有識の士の賞する所と為るも、古今沿革成敗の跡は大清図の未だ悉さざる者あれば、今沿革十余図を作り以て史を読む者に便ず」といつている。

沿革図は大清図を簡略化しただけだという人があるが、実際はそうではない。広輿図は人物の事績や古代の行政地理の地名の注記を加えた分だけ大きく、その分歴代行政区画の変遷については表現しがたくなってしまった。そこで沿革図の方は形式も一様でなく、広輿図よりも歴代行政区の地名がずつと多く、注記もさらに正確なものとなった。かれのように行政区の範囲を画きだすには、文献考証の力量をもつていなければならなかつた。赤水が生存した時代は中国では乾嘉考証学派が盛んであつたので、この影響を受けていたのであろうか。『唐土歴代州郡沿革地図』の原図を見た者は、「考証して誤つたことがわかつたら、何度も胡粉で塗りつぶして訂正している。著作の苦勞の跡が窺える」といつている。<sup>8)</sup>

#### 【沿革図の内容】

赤水の沿革図は十三枚の地図からなつてゐる(図版参照)。一枚目の大清国の道程図は出版当時の現代地図に相当するものであり、歴史地図集では欠かせない(図版①)。赤水には広輿図の経験があるので、この地図も清帝国内外の交通路と行程とを重ねて表現している。最後の亜細亜小東洋図は、東は北アメリカ沿海、西は中央アジア、日本は図の中央にちょうど位置している(図版⑬)。作者の祖国日本への感情が反映されている。残りの十一枚は年代順に並べ、水道や境域行政区の

変遷などを含む中国沿革地理の概要を伝えている。これは容易な仕事ではない。水道の変遷は黄河のとくに河源と下流に重点が置かれている。読者には禹貢の九河と漢代の大河の下流の違いがよくわかる。元朝以前の河源がよくわからず、元以後になって河源がはっきりしてきたことも見てとれる。黄河以外は長江河口の変遷を見ればわかるように、どちらかといえば水道の変遷は簡略であり、赤水は行政区画に重点を置いていた。

伝説ではあるが、夏の禹王が治水を行って天下を九州に分けたのが中国での行政区画のはじまりであった。したがって禹貢の九州がはじめての沿革図といえる(図版②)。今日すでに『禹貢』という書は戦国時代の人の著作であることが証明されており、九州とは理想であって現実のものではないことがわかっている。しかし当地図の意義が失われることにはならない。『禹貢』の本文から見れば、赤水の画いた九州図は正確に画かれている。かれの才能ぶりを示すとともに、かれが数多くの参考文献を参照したことの証しである。『禹貢』は儒家の重要な經典であり、明清時代には『禹貢』研究が学問の大きなテーマとなっていた。康熙年間の胡渭の『禹貢錐指』はその集大成であり、赤水は目にしたことがあっただろうか。

禹貢九州図のつぎは周職方氏の図であり、これは伝説上の周代の制度である(図版③)。天文星宿の分野と十五の国別地理も加えられており、後者はあきらかに『詩経』の読者のために画かれたものである。つぎは春秋列国図(図版④)、戦国七雄図(図版⑤)、春秋時期の周王の畿内と十二大国の領域、そして巴、蜀、閩越、南越の範囲を色別しており、多くの小国の名称も付けられ、一目瞭然である。戦国図は七雄

の表現に重心が置かれているが、七雄と並んでいた中山、衛、代などの国にも注意がはらわれている。楚国では後期に遷都した寿春も表示されていることは注目すべきことだ。秦始皇帝は六国を滅ぼして天下を三十六の郡に分けた。赤水は戦国図のつぎに秦三十六郡図を画いているが、郡名は『史記』の集解裴駰の注に基づいている(図版⑥)。三十六郡以外にも越の四郡があったが、これは当時の一般的見方であった。この四十郡の境域を色分けすることは難しい。正確とまではいえないが、赤水の初めての試みは賞賛の価値がある。秦図には「諸国峰起漢楚興亡」の關係事項が附記されており、たとえば陳涉の起、義帝の立、項羽分封十八諸侯のようにはっきりと示されている。両漢の郡国は数が多く、郡界を示すのは困難である。そこで秦図のあとの西漢州郡図(図版⑦)と東漢郡国図(図版⑧)は監察の州界だけを示してある。西漢の州境には錯誤が多いが、西漢の州の数と監察州の範囲については本世紀の三十年代になってはっきりしてきたので、しかたのないことであった。東漢図は個別的な場所を除けばだいたい正確であり、各州の境域には色分けしてある。西漢各州の範囲は作者自身が把握していなかったので、色をつけていないし州界にも画いていない所がある。両漢のあとは三国鼎峙図であり、この図には三国の領域と州郡の所在が画かれている(図版⑨)。この地図は蜀の側に立ち呉を敵としているようであり、荊州の地は蜀の地として呉には属していない。また魏が最初に鄴を都としたことや、呉が武昌に都を置いたという史実も表記されている。西晋は一時天下を統一したが、また分裂の形勢を迎えた。さきには東晋と十六国の並立、あとには南北朝の対峙、領域の区画の変容はきわめて複雑である。赤水はこの時期を「両晋南北朝郡

図(附五胡十六国図)の一枚の図だけで表示した(図版⑩)。簡略化を避けていたが、当時とすれば詳細な考証が困難であつてどうしようもなかつたのである。この図は実際に西晋太康元(二八〇)年の十九州を基礎に、劉宋が新しく設置した諸州を加え、十六国の北朝の興亡を図上に注記したものである。作者は東晋を正統、十六国を傍系としてゐるので、行政区画も南が詳しく北が簡単である。

南北朝が隋に統一されたが、隋代は短命で重要性も秦に劣るので、赤水は隋図を画いてはいない。隋から盛唐へつづく時代は、赤水は「唐十道図(附十五採訪使)」―目録では「唐十五道図」となっている―の図で表した(図版⑪)。漢代の郡は百数十であるので全部を図上に表記できるが、唐の州は三百余に上るのですべてを表示できない。道を主として表示するだけである。赤水の唐図の道は二つの時代を同一地図中に示しており、一つは開元十五道、もう一つは唐後期の藩鎮である。前者を主として後者を添えた。たとえば劍南道と西川節度使として表示した。唐後期の藩鎮の変化は大きく、総数は四十から五十の間、赤水は三十余の鎮を表示しているだけだ。たぶん『元和郡県図志』の書は見えていないのであろう。

「唐図にはすぐ「大明一統二京十三省図」がつづく(図版⑫)。この図は目録では「大明一統志図」としてあるので、あきらかに『大明一統志』に主として依つたことがわかる。色分けして省を区別し、あらゆる府城、州城を注記してある。この図集のなかでもっとも完全に正確な地図である。つまりは明代は当時からそれほど離れた時代ではなかつたので、資料も相対的に豊富であつたことを示しているのであろう。しかし唐と明の間には遼、宋、金、元の王朝があるのに、赤水の沿革

図ではなぜ欠けているのだろうか。赤水が知己の立原翠軒へ宛てた書簡によつて、われわれはこの理由を理解できる。<sup>9)</sup>

赤水は書簡のなかで計画中の沿革図集の内容について構想している。その第一段階は以下の十二枚の図を画くことである。すなわち大明国州郡里数図、禹貢図、周職方図、春秋列国図、戦国七雄図、秦三十六郡図、西漢図、東漢図、三国志図、唐十道図、大明一統図、亜細亜小東洋図であつた。もし百歳までつづがなく生きていける寿命があれば、そのほかの五枚、晋朝五胡図、南北朝図、五代図、宋史図、元史図も画くつもりであつたという。この老学者がもともとこうした着想までもつていたとは、驚くべきことである。かれは人生のすべてを學術に打ち込んだ。実際の図集の制作から見ると、この計画はのちに変更されている。第一図は大清国道程図に改められ、第二の計画の最初の二枚の図は合体して両晋南北朝図(附五胡十六国)となつた。五代、宋、元の三枚の図は完成させることがなかつた。かれはすでに残りの人生をかけて、『大日本史地理志』の編纂の仕事にとりかかつていたのである。

赤水の沿革図集は一見するとたいしたことのないようであるが、実はどれほどの心血をそそぎこんだものかはかりがたい。そうでなければ、第二の計画は容易に完成できただろう。赤水の知己立原翠軒が図集の序文でつぎのように述べている。

世の謬図に慣れ見る者は、翁の業を以て尋常の観と為す。則ち何ぞ其の細繹精思にして、心を用うること苦辛たるを知らんや。若し夫れ古を好むの士、委曲辨駁し、証を引き拠を考じ、左右源に逢えば、則ち翁の業は駭らかなり。

当然赤水の沿革図は完全なものではなく、錯誤も少なくない。しかし重要なことは、この図集が当時の最高の水準に達していたばかりでなく、百年もの間いかなる人も超えることができなかったことである。

『唐土歴代州郡沿革地図』は、すくなくとも二つ意味で前例のない業績であった。つまり日本で最初の正式な中国歴史地図集であったこと、そして世界でも最初の彩色歴史地図集であったことである。赤水以前の日本人には中国歴史地図集を編纂した者はいなかった。せいぜい経書を読むために画いた簡略な参考地図ぐらいであり、時代も先秦時代にかぎられていた。承応二（一六五三）年大原武清の『四書略図解』には、五帝から戦国までの六枚の図が収められている。彩色の歴史地図集などといったものは、中国でも出版されたことはなかった。中国の歴史地図では、ふつう墨と朱で古今の地理の違いを区別して画くだけである。墨で古代、朱で現代の地理を示すこともあれば、その逆のこともある。南宋の程大昌は『禹貢山川地理図』を作り、「図は色を以て別け、青は水と為し、黄は河と為し、紅は古今の州道郡県の疆界と為す。其れ雖黄を用て識と為す者は、則ち旧説の末だ安ぜずしてこれを表出する者なり」といつている。しかし当時の印刷技術には多色刷りの方法がなかった。そこで刊行のときには黄色と黒の二色に改められた。六百年後の江戸時代、彩色絵画が流行し、高度な印刷技術も影響を与えた。赤水の図はすべて彩色画として登場した。読者の目を楽しませただけでなく、地図を読むときには一目瞭然であった。たいへんな業績といわざるをえない。

## おわりに

赤水の沿革地図集の水準は相当なものであったし、日本でその後に編纂された歴史地図集は多大な影響を受けた。『唐土歴代州郡沿革地図』の初版が出てから二十年、文化十二（一八一五）年松山義慎の『本朝往古沿革図説』が出版された。これはあきらかに赤水の啓発をうけて制作された日本歴史地図集であった。興味深いことは、赤水の図集に序文を書いた立原翠軒がこの図集にも序文を記していることである。

赤水の沿革図集を模倣した『唐土中興沿革地図』も、嘉永元（一八一八）年に刊行された。南寿老人の署名、秦から西晋にいたる十枚の地図集である。底図は完全に赤水の翻刻であり、地名に漢字を用いずに片仮名を使っているにすぎない。同時に各図に詳細な図説を附しているのは、普及させることを目的としたのであろう。図集の年代は先秦と東晋の間の時期のものであり、完全な中国歴史地図集とはいえない。四つの王朝史の参考書にすぎないという人もいる。図集名の唐土中興というのも奇妙であるし、各図の名称や内容はさらに不可能である。十枚の図は秦始皇二十七年三十六郡建置の図、秦二世皇帝元年諸国蜂起の図、秦三世即位元年漢楚興亡の図、漢王大漢一統の図、東漢中平年中郡国の図、呉主江東平治の図、建安二十五年三国鼎峙の図、孔明南征并魏蜀交戦の図、蜀炎興二年魏益州并の図および西晋大康元年一統の図である。地図の名前も三家村冬烘先生がまねたものであり、漢文にも精通していない（第九図では魏并益州を日本語の語順で魏益州并としている）。第一図の秦始皇二十六郡図にはもっと無理がある。

三十六郡の範囲はここには表現せず、第二図の秦二世の方へ移してある。始皇が三十六郡を設置したのは二十六年であるのに、この図では奇妙なことに二十七年となっている。このほか秦三世の言い方も作者の杜撰から生まれたものである。この地図には欠陥が多いが、本稿の主旨とは関係ないのでこれ以上はふれない。要するにこの図集は秦から晋の間は赤水の沿革図よりも詳しいようだが、実際はそうではなく模倣にすぎないのである。

刻版の出版以外に江戸時代には抄本の模倣本も現れた。筆者は内閣文庫で『中夏古今州郡図譜』と題する彩色の抄本三冊を目にした。当然この図の水準は赤水の図を超えるものではない。新しい形態の中国歴史図集は明治になってようやく出現した。明治十四（一八八二）年河村与一郎の『支那歴代沿革図説』が出版された。寛政元年から九十年あまりたつてからのことである。この図集の最大の特徴は宋図と元図を加えたことと、同時に木版から銅版に改めたことにある。しかし図の形式、内容はともに赤水の沿革図を参考にし、利用している。もちろんまったく任意に彩色をほどこし行政区域も分けていないことなどは、沿革図におよばない点である。その後すぐ明治二十六（一八九三）年刊行された山本頼輔の『新撰支那歴代沿革地図』もだいたい同じだ。とくに赤水の沿革図は個々の図がほかの人に引用されたり、翻刻されたりすることが多かった。<sup>10</sup>赤水沿革図の直接の影響は一世紀もの長きにおよんでいる。

重野安繹と河田龍同の『支那疆域沿革図』は、完全に新しい形式の中国歴史地図集といえよう。明治二十九（一八九六）年に出版され、底図は現代の精密な測量図を使っている。朱と墨で古今を色分けした

十六枚の地図は、夏代から清朝までの地理沿革を示している。しかし国境や行政区域の変遷はまだしも、河流の水道の変化は赤水の図にはまったくおよばない。また行政区域の名称はよいが、行政区域の境界線などには注意がおよんでいない。中国でも本世紀初めの揚守敬の『歴代輿地図』が現れるまでは、とりあげるだけの価値がある歴史地図集は出版されていない。同治十（一八七〇）年に刊行した『歴代地理沿革図』は、李鴻章の署名となっているが実際には馬徵麟の撰であり、朱墨二色の簡単な小型図冊である。もちろん内容や形式も赤水の図とは比較にならない。

このように考えてみると、赤水の『唐土歴代沿革地図』は日本の地図史上はもちろん、日中文化交流史上でも重要な意義と役割があったことは、見過ごすことができない。長い間日本の学界では、この偉大な人物とその業績に目を向けなかった。中国人もまた日本にこのような優れた学者がいて、古稀の年齢まで日本人に中国文化を伝え続けてきたことを知らなかった。筆者は逝去百九十年にあたる歳に、とくにこの文章をしたため、碩学の教示をこいたい。

#### 註

- (1) 西田与四郎「長久保赤水の地図に就きて」『史学雑誌』三二編五号、一九二〇年、海野一隆「江戸時代刊行のシナ図」『大阪学芸大学紀要』九号、一九六一年、「長久保赤水のシナ図」『人文地理』十四卷三号、一九六二年、「赤水のシナ図をめぐって」『地理』十三卷一号、一九六八年、長久保光明「長久保赤水の中国地図・世界地図編集について」『地図』九卷二号、一九七一年。

- (2) 杉田雨人「長久保赤水」水戸平野書店、一九三四年、茨城県郷土文化研究会、一九七〇年、長久保片雲『地政学者長久保赤水』東京暁印書館、一九七八年。

(3) 海野一郎前掲論文。

(4) 茨城の長久保光明氏も県歴史館で同様の資料を発見している。

(5) 『宋本歴代地理指掌図』上海古籍出版社、一九八九年。

(6) 海野一郎前掲論文「江戸時代刊行のシナ図」。

(7) 茨城大学所蔵。安政四年版『唐土歴代州郡沿革図』。

(8) 西田与四郎前掲論文。

(9) 海野一郎前掲論文「赤水のシナ図をめぐる」。

(10) 長久保光明前掲論文「長久保赤水の中国地図・世界地図編集について」。

#### 【附記】

本論稿は中国の復旦大学歴史研究所教授周振鶴と茨城大学教養部助教授鶴間和幸の共同研究「古代東アジアにおける文化と地域―人の移動と文化の変容」の成果の一部である。周は一九九一年三月十九日から八月十八日まで茨城大学外国人研究者として滞在中、茨城の地に生まれた重要な人物と出会った。それが長久保赤水であり、以来中国人のしかも歴史地理学者の鋭い眼からこの人物の業績を調べていった。

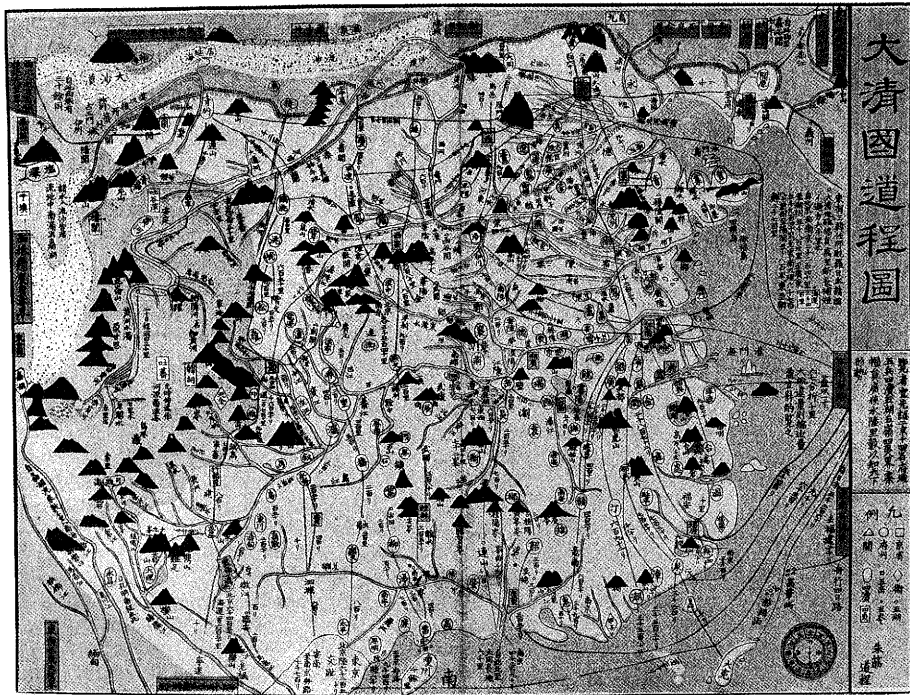
共同研究者の鶴間も、本来の共同研究の副産物として、周自身復旦大学譚其驥主編の『中国歴史地図集』（五八冊の大事業に参加した）周の熱意に刺激されながら一緒に赤水の生誕地、墓地を訪ねたり、筑波大学、東京大学、国会図書館、神戸市博物館などへ足を運んだ。東京本郷の古書店で『唐土歴代州郡沿革図』を偶然発見したときは、早速購

入するほどこの地図に魅せられた。中国にも例のない彩色豊かな中国歴史地図の美しさは、江戸時代に発達した錦絵、浮世絵の世界を彷彿とさせ、江戸時代の出版技術の高さを改めて知る思いであった。しかしこのようなものを教材にしてまで中国の歴史を学ぼうとした日本人にとって、中国とはいったい何であったのだろうか。最後に行き着いた大きな問題であった。

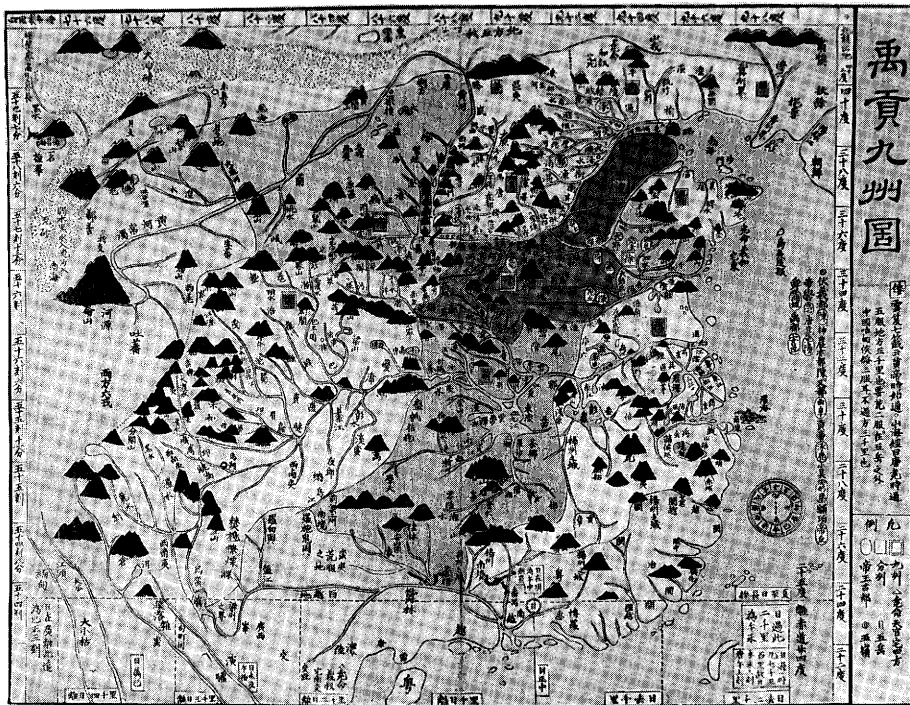
さて入稿後の昨年一九九二年八月二八日、周の恩師である復旦大学歴史地理研究所元所長の譚其驥先生が逝去された。鶴間も一昨年九月に上海のお宅に訪問し、周を交えて長らく懇談する機会を得た。周はもちろん鶴間にとっても尊敬する偉大な学者であり、心から哀悼の意を表したい。本論稿も譚先生に捧げたい。

最後にこの共同研究を基金面で支えてくれたアンペール社の草柳高志氏に謝意を述べたい。海外の優秀な中堅研究者を茨城の地に呼び日本研究者とレベルの高い共同研究をすることが明日のアジアのためになるというわれわれの夢に快く同意された氏の器量と見識がなければ、今回の共同研究は実現しなかった。

〔図版〕『唐土歴代州郡沿革地図』(安政四年版)



① 大清国道程図



② 禹貢九州図





③ 周職方氏圖



④ 春秋列國圖

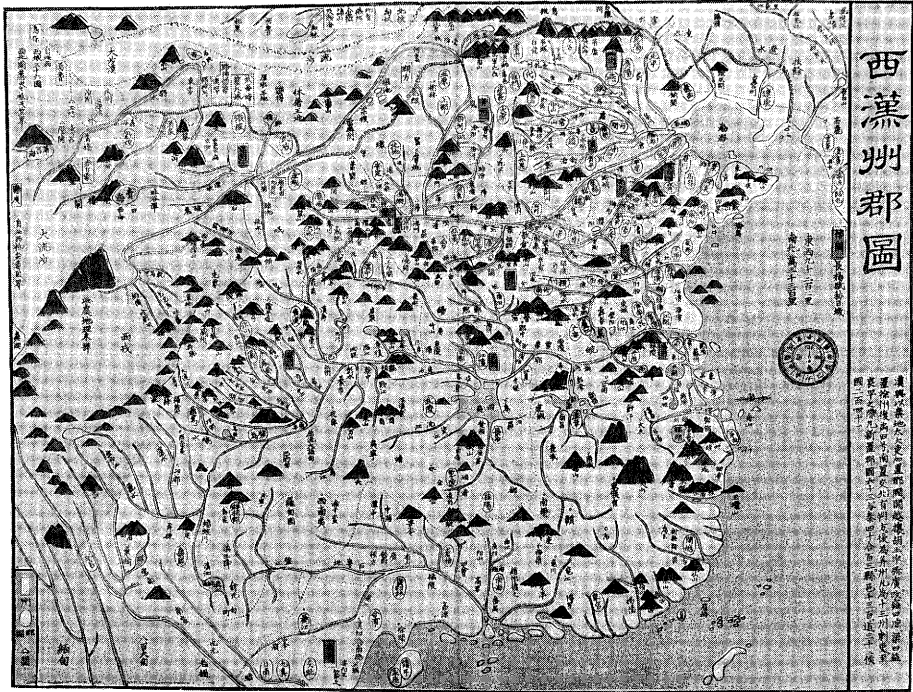




⑤ 戦国七雄図



⑥ 秦三十六郡并越四郡  
附諸国蜂起漢楚興亡



⑦ 西漢州郡圖



⑧ 東漢郡國圖

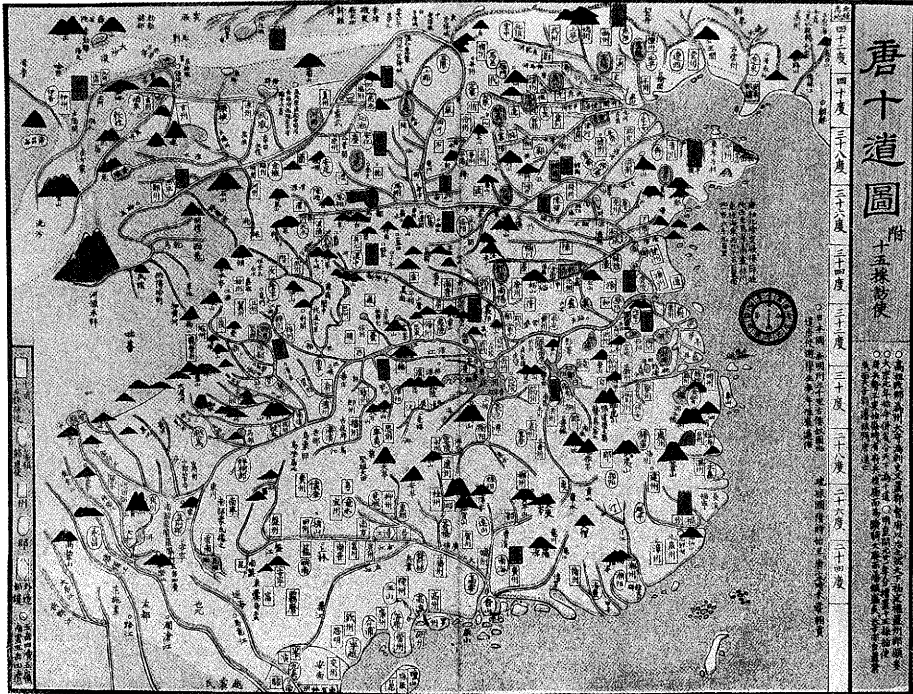


⑨ 三国鼎峙图



⑩ 两晋南北朝州郡图 附五胡十六国





⑪ 唐十道圖 附十五採訪使



⑫ 大明一統二京十三省圖

